温故知新

～我が街・川口に想う～

ともに地元川口で鋳物業を営む家庭に生まれ、街の移ろいを体感してきた岡村幸四郎川口市長と細野壽雄川口商工会議所会頭。川口市の行政と産業界を代表するお二人に、幼いころの懐かしい思い出や変貌する街の様子、そして川口の魅力とこれからの展望などについてお話をうかがった。

川口市長　岡村幸四郎

産業の振興なくして、街の前進なし

●少年時代の記憶

家業が鋳物業でしたので、幼いころから工場の匂いと砂の中で育ってきました。特に、職人達の真っ黒な顔や手、元気に働く姿を鮮明に覚えています。今にして考えれば、まさに日本の高度成長の担い手だったのでしょうね。

鋳物産業が隆盛を極めていた昭和30年代は、印象深いことが多くありました。昭和33年に開催された第3回アジア競技大会で使用された聖火台は、当時祖父が社長を務める会社を通じて川口の鋳物職人鈴木萬之助、文吾親子が、大変なご苦労の末に製作したのです。昭和39年の東京オリンピックの時にも、国立競技場でこの聖火台が使われたのです。この東京オリンピックの1年前、昭和38年には今上陛下（明仁陛下）が、皇太子時代に祖父の会社を視察されました。日の丸を振ってお出迎えし、お見送りしたことは懐かしい記憶です。

写真一番右が岡村市長

少年時代を高度成長期の中で過ごしてきたわけですが、もちろん、経済も政治も分かるはずはありません。しかし、家業の様子や街の活気を通して、この国の洋々たる前途を肌で感じていました。

●劇的な都市の変貌

鋳物の匂いやキューポラの煙に包まれた40年以上前の川口が私の原風景ですので、今の街並みには、まさに隔世の感があります。この間の社会情勢や産業構造、あるいは住居形態などの変化は市民の皆さんが一所懸命に汗を流し、努力してきた結果だと思っています。

私が市長になってからも様々なことがありました。最近では、川口駅東口の「キュポ・ラ」の完成は最も印象深いことのひとつです。川口産業会館跡地の「かわぐちキャスティ」、サッポロビール埼玉工場跡地の「リボンシティ」とともに、劇的に川口駅周辺が変化を遂げました。また、市民の永年の願いであった県内初の地下鉄「埼玉高速鉄道線」の開通や、我が国最大の映像・情報産業の拠点SKIPシティもオープンするなど、川口は未来につなぐ産業と文化を発信する「賑わいと憩いのある街」へと大きく変貌しています。

●ものづくりの街かわぐち

このように変遷を辿ってみると、やはり街というのは生きているというふうに思いますし、その中で川口が"川口らしさ"を失わずに成長を続けていることは、大変喜ばしいことです。

私はよく「産業の振興なくして、街の前進なし」と言っています。川口はものづくりを中心に発展してきた街ですし、これからもその伝統を守っていかなければならないと思っています。SKIPシティのような最先端の施設が川口に誕生したことも、永年培われたものづくりの風土と決して無関係ではないでしょう。

さらに川口の特徴としては、多面性や多機能性という要素が大いにあると思います。首都近郊での工業都市の性格を強く帯びてきた本市ですが、一方で安行植木という世界に誇る伝統的な緑化産業もあります。

岡村　幸四郎（おかむら　こうしろう）
第12代川口市長

また、高層ビルやマンションが立ち並ぶ近代都市の側面と、見沼田んぼのような広大な自然を併せ持っている。これらのことは、この街の大きな強みであり魅力だと感じています。

●市民、行政の協働による街づくり

川口が守り、培ってきたものを活かしながら、私は目指すべき都市像として、「緑　うるおい　人　生き活き　新産業文化都市　川口」を掲げています。どれくらい多くの市民が毎日を生き活きと過ごしているかが、よい街のバロメーターであると思いますし、そのための行政の大きな目標が、市民満足度をいかに高めていくかであると考えます。

アメリカの35代大統領ジョン・F・ケネディ氏が大統領就任の際に、「国家があなたのために何をしてくれるかではなく、あなたが国家のために何ができるかを問おうではないか。」と演説されましたが、まさに、この名演説に凝縮されていますが、市民の満足感には、どれだけ行政サービスを受けられるかということと、単なるサービスの受け手としてではなく自分が主体的に物事に関わることで得る満足感があると思います。このような自己実現、社会貢献を目指す市民と行政の協働による仕組みと場づくりは、これからの街づくりにおいては不可欠だと思っています。私は、市民の皆さんが「この街はよい街だ」「住んでよかった」と思える魅力溢れる都市・川口を築き上げていきたいと考えています。

川口商工会議所会頭　細野壽雄

魅力都市・川口の継承が使命そして役目

●幼き頃の記憶

大工のせがれだった父が、昭和6年に独立し鋳物業をはじめました。幼いころはよく工場内で砂いじりをしていました。きっと、公園や海岸の砂で遊ぶような感覚だったのでしょうね。

当時の鋳物屋は、鋳型などの砂を再利用するため、ひと晩かけて適度な乾燥と湿気を持たせていましたが、ある朝、父がその砂山に手を入れ、握った砂の感触で製品の不良率をピタリと当てたことがありました。他にも、溶けて赤く流れる鉄（湯）の温度をその僅かな色の加減から目視によって測ったりと、職人の勘や技術に度々驚かされたことを覚えています。

第二次世界大戦の最中、旧制川口工業学校のころに学徒動員の命令が下り、市内の工場で迫撃砲の砲弾を作ったことも忘れようのない記憶です。同じころ、私共では潜水艦の部品を作っておりましたし、川口市内の多くの鋳物工場が、何らかの形で軍需産業にかかわりを持っていたと思います。戦後は一転、産業機械や農業機械など平和産業発展の一翼を担い、川口の産業界は成長を続けました。私共も戦時中の技術を活かし、水道やポンプ用の鋳鉄異形管を生産するようになりました。

1964年東京の異常渇水「東京砂漠」の給水対策に使用された導水管の本管。

●変貌を遂げる川口

昭和37年の映画「キューポラのある街」で全国的にも有名になった川口ですが、当時、鋳物工場は630社ほどありました。川口駅の周辺でも多くの鋳物工場が操業し、駅を降りれば鋳物特有の匂いを感じたものです。さらに、川口の工業全体で申しあげれば、事業所数2，200社、従業員数は5万人を超えていました。この時の人口が約18万人ですので、いかに川口が工業都市の色彩が強かったかをご理解いただけるかと思います。

私は、ほぼ商工会議所の歴史に沿って川口を見てきましたが、当時の状況からは街の様子も産業を取り巻く環境も大きく変貌しています。川口駅周辺に象徴されるように、公益・商業施設や高層マンションが相次いで建設され、埼玉県の南の玄関口として相応しい街並みが形成されつつありますが、その一方で、住工混在や地価高騰などの問題も顕在化しています。また、都市の変化とは別に、景気や後継者の問題、海外とのコスト競争など、中小企業は様々な経営課題に直面しています。鋳物工場を例にとれば、現在は80社ほどに減少しているのではないでしょうか。

●ものづくりの歴史と伝統は大切な資源

私は今、このような都市や経営環境の著しい変化に対応した、新たな産業都市としての将来ビジョンが必要かと思っています。川口には、歴史と伝統に培われたものづくりの優れた技術やそれを推進する行政、業種団体などの支援体制が整っていますし、依然として県下有数の工業集積地としてのブランド力を持っています。これは本当に大切な資源であり、財産でもありますね。また、SKIPシティのような産業を支援する立派な施設もできあがり、映像産業に代表される新たな産業が芽吹きつつあります。そして、商業やサービス業などの観点からは、新しい市民の方がどんどん増えてきていますし、なによりも50万都市としての潜在的なパワーといいますか、ポテンシャルはたいへん高いものがあると感じています。

このように、旧来から持ち続けている特徴や強み、あるいは変化の中で生まれた新たな魅力を踏まえながら、行政との連携を密にし今後の産業振興と街の活性化に取り組んで行こうと考えています。

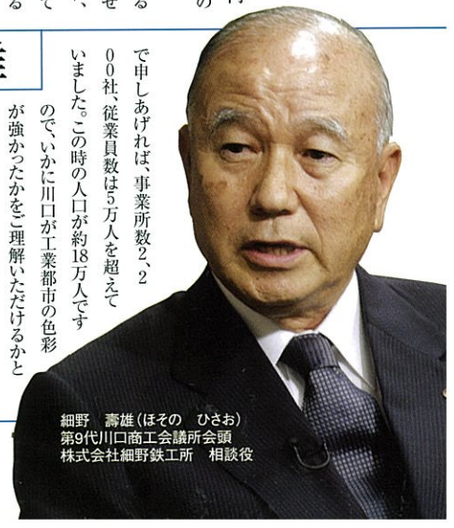
●信頼される商工会議所を目指して…

このたび川口商工会議所は、創立70年という大きな節目の年を迎えることが出来ました。ひと口に70年といいますが、その歴史はたいへんに重みのあるものです。会員、市民、先人諸先輩、そして歴代市長さんをはじめとする行政ご当局のみなさんなど、数多くの方々のご苦労ご支援があったからこその結果であり、改めて深く感謝申しあげる次第でございます。

私は生粋の川口っ子であり、今も「この街に住んでよかった」と思っています。市民の皆さんやその子孫が、新しい70年後もそして100年後、200年後もそう思える川口であって欲しいと心から願っています。そのために、先人たちの築かれた知識や経験をしっかりと踏襲しながら、「魅力と活力に満ちた川口」を次の時代に継承することが我々の使命であり役目なのだと考えています。

人、街、産業は一日も休むことなく変化を続けます。決して簡単なことではありませんよね。しかし我々はこれからも、元気な川口の創造と、会員の皆さんはもとより市民の方からも信頼される商工会議所を運営して行きたいと、そう思っているんです。

SKIPシティ



細野　壽雄（ほその　ひさお）
第9代川口商工会議所会頭
株式会社細野鉄工所　相談役